

### 3) 多発胃悪性リンパ腫とⅡc型早期胃癌が併存した1例

登坂 尚志 (巻町国保病院  
内科)  
白井 良夫 (燕労災病院  
外科)  
鈴木 力 (新潟大学  
第一外科)

症例は68才の女、約4ヶ月間出没する胃のもたれと心窩部痛あり。近医で胃内視鏡検査を受け、生検で悪性リンパ腫と診断され、当院に紹介された。術前の再検で、前庭部～胃角の後壁と胃角の小弯のⅡa+Ⅱc様の悪性リンパ腫の病変以外に、体上部後壁にⅡc様病変を認め、内視鏡所見より早期胃癌を疑い、胃全摘術を施行した。病理組織学的には前庭部と胃角の後壁の病変も連続性がなく、3ヶ所の多発胃悪性リンパ腫で diffuse large cell type、胃角後壁の病変は pm、他の2病変は sm であった。体上部後壁の病変は低分化型腺癌で、一部印環細胞癌を混じ、深達度は sm、この病変の肛門側の一部から大弯にかけて、異型リンパ球細胞の浸潤が粘膜固有層内に認められた。

### 4) 当院において経験した乳頭部癌の2例

坂井洋一郎・山川 良一 (新潟潟医協下越病院)  
安達 哲夫・羽賀 正人 (内科)  
五十嵐 修・斉藤 俊一 (同 外科)  
時光 昭二  
樋口 正身 (同 病理)

当院で経験した乳頭部癌の2例についてその臨床所見、十二指腸内視鏡所見、ERCP 所見、手術標本を中心に若干の文献的考察を加えて報告した。症例1は47才の男性で主訴は黄疸であった。十二指腸乳頭部の内視鏡所見では乳頭部の腫大と不整形のびらんを認めた。ERP 所見では膵管の拡張を認めた。手術標本では大きさ10×10mm で Oddi 筋内にとどまり Stage 1 であった。症例2は63才の女性で、主訴は発熱と黄疸であった。十二指腸乳頭部の内視鏡所見では乳頭部の腫大と片側性のびらんを認めた。手術標本では大きさは10×8mm で一部十二指腸筋層に浸潤があり Stage 2 とした。十二指腸乳頭部癌の診断において十二指腸内視鏡検査及び膵胆管造影は有用であった。

### 5) 黄疸を来す前に超音波検査にて診断しえた小膵頭部癌の1例

中平 啓子・村山 裕一 (村上病院  
外科)  
山寺 陽一・清水 春夫 (新潟大学  
第一病理)  
黒崎 功

症例は上腹部不快感を主訴として来院した66歳の女性で、入院時発熱、黄疸なく、血液検査で軽度の肝機能異常を認め、血清総ビリルビン 0.5mg/dl、血清アミラーゼ 214単位と正常であった。腹部超音波検査で胆管の拡張とこれに接した直径 21mm の腫瘤像を認め膵頭部癌と診断した。膵管の拡張は認めなかった。CT では腫瘤像を指摘しなかった。ERP では主膵管の断裂を、また腹腔動脈造影では前上膵十二指腸動脈の分枝に encasement と同部位に径約 1.5cm の無血管域を認めた。切除可能な膵頭部癌と診断し、膵頭十二指腸切除術を行なった。切除標本では膵内胆管に接して20×17×10mm の腫瘤を認め、T1, s0, ch2, rpe, stage Ⅲの小膵癌であり、絶対治療切除であった。膵癌の早期発見に於ける超音波検査の有用性について改めて認識させられた。

### 6) Ⅱb型早期胆嚢癌の病理形態学的検討

羽賀 正人・渡辺 英伸 (新潟大学  
第一病理学教室)  
黒崎 功・鬼島 宏 (同 第一外科)  
味噌 洋一  
白井 良夫・内田 克之 (同 第一外科)

今回、我々はⅡb型早期胆嚢癌の病理形態学的特徴及び肉眼的鑑別診断について検討した。対象は過去7年間に当教室で検索された微少癌を除くⅡb型早期胆嚢癌20症例20病変(全早期癌の29%)。Ⅱbの定義は癌巣の粘膜全体が周囲の非癌粘膜とほぼ同じ高さを示しているものとした。診断率は術前画像診断 0/20、術後新鮮材料 2/20 (10%)、固定材料12/20 (60%)であった。固定材料で病変の指摘が可能であったのは微細～粗大顆粒状10例、微細乳頭状2例の粘膜像であった。異常を指摘できなかった8例は炎症あるいは自己融解等で全例表層上皮が脱落傾向にあった。よって表層上皮が保たれていれば、高分化腺癌に特徴的な粘膜像が存在しており、肉眼診断及びPTCCS 等による画像診断の可能性が示された。

### 7) 腹腔鏡検査で肝左葉萎縮性癭痕肝と思われる1例

早川 晃史・山本 賢 (田代消化器科病院)  
斉藤 建吉・田代 成元 (新潟大学第三内科)  
渡辺 俊明

症例は59才の男性、昭和63年2月末より心窩部痛と嘔気あり、3月16日当院初診。胃角部活動性潰瘍と GOT、

GPT,  $\gamma$ -GTP 上昇を指摘. 肝シンチグラム・腹部 CT により肝左葉の低形成ないしは著明な萎縮が疑われ腹腔鏡検査施行. 肝左葉は著明に萎縮, 広汎な白色癍痕と局所的な再生肥大形成, 肝右葉は軽度凹凸を示し小円形斑紋形成や白色紋理増強などいわゆる斑紋肝の所見を認めた. 右葉よりの生検組織では活動型慢性肝炎と診断. 肝左葉の萎縮が慢性肝炎による癍痕萎縮なのか, あるいは, 先天的な低形成なのかを鑑別する為に ERCP および腹部血管造影を試みたが, 動脈枝, 胆管分枝には異常なく, 先天的な低形成は考え難い.

8) 肝腫瘍に対するアドリアマイシン/リピオドール エマルジョン動注療法

阿部 要一・勝木 茂美 (木戸病院) (外科)  
 津沢 豊一 (高山医科薬科) (大学 薬剤部)  
 上野 雅晴 (新潟大学) (第二病理)

リピオドールを制癌剤のキャリアーとして用いる目的で, 界面活性剤である HCO-60 を用いてアドリアマイシン/リピオドール w/o 型エマルジョンを調製し, 肝悪性腫瘍 5 例 (原発性肝細胞癌 2 例, 転移性肝癌 3 例) に動注した. 腫瘍マーカー高値の 2 例は投与後いづれも減少し, リピオドールの腫瘍内沈着の著明な原発性肝癌 1 例では明らかな抗腫瘍効果をもとめた. 本剤は高い徐放性を示し, リピオドール貯留の顕著な hyper vascular 腫瘍には長時間高濃度制癌剤の作用が期待された.

9) 特異な経過を示した小腸癌の 1 例

寺田 正樹・加藤 俊幸 (新潟県立がんセン) (ター新潟病院) (内科)  
 丹羽 正之・斎藤 征史 (ター新潟病院) (内科)  
 小越 和栄 (ター新潟病院) (内科)

症例59歳の男性. 貧血のため他院で輸血を受け, 上部下部消化管を頻回に検索したが異常を指摘されず, 3年3カ月経過した. S62年4月に下痢を主訴に来院, 直腸診で直腸腫瘍を疑われ入院. CT 上膀胱直腸間に10×8cmの充実性腫瘍があり, CF では直腸粘膜下からの圧迫狭窄を認め, 直腸肉腫を疑った. 圧迫によるイレウスのため開腹したが, 小骨盤腔を占める腫瘍が周囲臓器へ浸潤しており, 人工肛門のみ造設. 組織は分化型腺癌で, 腹腔内リンパ節転移を伴う管外発育型直腸癌を考えた. 腹部照射と UFT 内服で腫瘍は8×9cm大に縮小し直腸内腔と交通, 空洞を形成. 狭窄症状は改善したため一時退院したが, イレウスで再入院, S63年2月悪液質で死亡. 剖検時, 小腸癌の直腸上部への穿通と判明. 貧血から全経過4年と診断に苦慮した一例であった.

10) 下血を繰り返した回腸微小血管腫の 1 例

小池 雅彦・広瀬 慎一 (長岡赤十字病院) (内科)  
 遠藤 次彦・川村 正 (長岡赤十字病院) (内科)  
 和田 寛治・田島 健三 (同) (外科)  
 新田 幸寿・神谷岳太郎 (同) (外科)

消化管出血は, 日常しばしば経験する症候であるが, 小腸に起因する出血は全消化管出血の1%程に過ぎず, 比較的稀とされている. 今回我々は, 原因不明の下血にて入院し, 種々の検索を行うも診断困難であった回腸微小血管腫を経験したので報告する. 症例は60歳の男性. 主訴は下血で, 他院にて検索を受けるも, 出血源不明なため, 当院へ紹介された. 入院時より著明な貧血と下血を繰り返し, 上部, 下部消化管検査で異常なく, 小腸出血が疑われ, 小腸二重造影, 血管シンチなどを行うも診断不能であった. 手術が施行され, 回盲部より約1m口側に腸間膜, 腸管壁の血管拡張及び増生がみられ, 同部が出血源と推定され, 部分切除を施行した. 病変は粘膜下に存在する2mmの微小毛細血管性血管腫で, 粘膜に大きく潰瘍を形成しており, 同部より出血したものとされた. 以上, 出血部位の術前診断が困難であった2mmの回腸微小血管腫を経験したので報告した.

11) X線的に逆追跡可能であった虫垂結石症の 1 例

小林 英司 (町立相川病院) (外科)  
 原 滋郎 (県立小出病院) (外科)

指圧等で破壊されずX線上鮮明な陽性像を呈するいわゆる虫垂結石症は比較的まれと言われるが, たとえ無症状であっても重症の虫垂炎に発展する可能性が大きく気をつけなければならない. 今回穿孔性虫垂炎患者の摘出虫垂内に虫垂結石を認めたので報告する. 以前より腰部圧迫骨折にて再三X線を施行しており, これにより虫垂結石を逆追跡することができた. 患者は55歳の男性. 回盲部痛を主訴に来院. X線上回盲部に鮮明な陽性像を認めた. 急性虫垂炎の診断にて虫垂切除施行. 虫垂は穿孔しており同内腔には直径1.0cmから0.5cmまでの計7ヶの指では容易につぶすことのできない結石を認めた. 同結石の断面は層状構造を示し, 赤外線吸収スペクトル分析をするとリン酸カルシウム, 炭酸カルシウムを含む無機物であった. 同結石はX線上1年前まで逆追跡することができた. 以上の患者を含み現在まで経験した虫垂結石5症例を文献的考察を加え報告した.